

W.ラーベの作品：“Eulenzungen”について

—日常性にひそむ非日常性・グロテスクと投機的表現—

川崎医科大学 外国語教室

永 末 和 子

(昭和61年 9月17日受理)

Über W. Raabes Novelle, “Eulenzungen”

—Das Groteske in der alltäglichen Welt und die
spekulative Darstellung—

Kazuko NAGASUE

Department of German, Kawasaki Medical School

Kurashiki, 701-01 Japan

(Received on Sept. 17, 1986)

Einführung

Wir könnten diese Novelle als eine groteske Erzählung bezeichnen. Dabei beruhen wir auf dem Grotesken-Begriff nicht von W. Kayser, sondern von H. Helmers, d. h. auf der “realistischen Groteske”. Raabes Groteske stammt stets aus der Wirklichkeit, wo das Groteske angesiedelt ist, infolge es in die Alltäglichkeit, die Gewohnheit eingefangen wird.

Wenn wir uns den Satan-Begriff Raabes in dieser Novelle überlegen, dann macht das uns klar. Raabe behauptet; “Es ist nicht wahr, daß die Nacht die Finsternis, vorzugweise das Reich des Bösen ist; im Gegenteil, es macht ihm gerade ein Hauptvergnügen, den schönen, hellen, lichten, sonnigen Tag zu seinen schlimmen Werken zu benutzen.” (S. 370)

Hier betrachten wir, wie Raabe das Groteske in seiner Erzählung darstellte.

序

当作品をグロテスクな物語と呼ぶことができますと思いますが、その際、グロテスクの定義は W. カイザーのものによらず、H. ヘルマースの定義、即ち「写実主義的グロテスク」によります。ラーベのグロテスク性は、グロテスクなるものが日常性の中に取り込まれることによって、いまや定住することになった現実から生じてくるものだからです。

もし、我々がこの作品中のラーベのサタンの定義づけを読むならば、そのことが明かとなるであります。ラーベはこう言っているのです、「夜、暗闇といったものが、もっぱら邪悪の帝国であるという考えは真実ではないのです。その逆に、そう考えることが、彼に好機を与えるのです。あの美しい、明るい、光り輝く、太陽のさんさんとさす日中を彼の陰險な産物のためにたっぷりと利用させるのです。」(370頁)

ここで我々は、ラーベがグロテスクなるものを作品中にどのように描出していったかを考察する

ことにいたしましょう。

中期のラーベが独自の文学世界を確立させようとしていたことは、残存する書簡類をみても明かですが、その意欲に燃えて、彼は五作品を一つにまとめて“Krähenfelder Geshichte”という作品集を出します。今回とりあげます作品“Eulenpfingsten”(1874)はその作品集の第三作目に当たります。この連作に共通する際立つ特徴に日常性を逸脱する強烈な人物像というものがあげられます。

人間の心のうちに潜んで、ときに狂気じみた行動をとらせる力を、プラトンは『パイドロス』のなかでエロスと名付けています。勿論、ここでは恋が論じられていますから、「盲目的な欲望が、正しいものへと向かって進む分別の心にうち勝って、美の快樂へと」¹みちびかれますが、そもそも、このエロスは『饗宴』の中でディオティマがソクラテスに説明するように Daimonion の一族です。このギリシア語はもちろんドイツ語の Dämon のことでありますし、この形容詞形をゲーテが das Dämonische (デモーニッシュなるもの) と用いて、人間の内面から湧きでてくる芸術的創作力を意味したことはあまりに有名ですが、ともかくこのデーモン(魔神)は神と死すべきものとの中間にあり、ディオティマの言葉をそのまま引用しますと、「神々へは人間からのものを、人間へは神々からのものを伝達し、送りとどけます。つまり、人間からは祈願と犠牲を、神々からはその命令と犠牲の返しを、というわけです。そして、この両方のまんなかにあって、その空隙を満たし、世界の万有を一つの結合体に行っているものです」²が、エロスはその出生からして³、「手に入れるものはいつも手のあいだから漏れおちて」しまい、「けっして困窮しないかわりに、また富んでもいない」のであり、知に関していえば、これも知と無知の中間に位するものと言い、こう説き明かしています。「神々にあっては、神はすでに知者ですから、知を愛することはなく、知者になろうと熱望することはありません。しかし他面、無知蒙昧な者もまた、知を愛することはなく、知者になろうと切望することもないのです。この、自分は理想的な者でも思慮ある者でもないのに、間然するところのない人間だと自分の目に映ることこそ、無知の厄介なゆえんではあるのですけれども。ともかく、自分に欠けたところがあるなどとは考えない者が、欠けているとは思っていないその当のものを欲求するわけがないではありませんか」⁴と。

こうして、恋するエロス、即ち欠け目を知り切望するエロスが人間を狂気じみた行動に駆り立てる力、しかも、抗しがたい力であることがはっきりいたしますが、いま我々が話を進めてゆきたいと思っていますことは、この《切望するエロス》であります。もちろんこの作品には A. ローレンツが、彼の論文『ラーベの作品におけるエロス』⁵で触れているように、普通の意味でのエロスもたしかに存在しますけれども、それはさておき、もし我々がこの“Eulenpfingsten”で、上に引用したディオティマの説明の厄介な無知者という皮肉ばい視点からこの作品をながめ下ろすならば、まったくもってこの作品は喜劇ということになってしまいます。

常軌を逸脱させる魔力であるエロスに襲われますと、自己自身につき動かされ、こづき回さ

れ、熱っぽく沸き立ち、いらいらし、この大地が足もとから沈んで、空を泳ぐかのようになるのですが、実にそうしたことが、作中人物の行使館参事官アレックス・フォン・ネーベルング氏 (Alex von Nebelung) に起きます。彼は年来の付き合いの隣家の市通商顧問官・タバコ工場の工場主フローレンス・ニュレンベルク氏 (Florens Nürrenberg) の庭で、いつものように午後のひとときを過ごしています。しかし、その日は聖霊降臨祭 (Pfingsten) の前日、もう少しすれば二十年ぶりにアメリカから妹が帰ってくるという大事な日です。歓迎の準備も万端ととのったネーベルング氏は駅へむかえにいく前のいつときを、ごく日常的な歴史がらみの政治を話題にしながら、過ごしているとき、彼としては気をきかせたつもりで、即ち、神聖ローマ帝国滅亡の悲喜こもごも一切に、弁明の機会を提供しようと、ニュレンベルク氏の生国の都市・神聖ローマ帝国直属ロットヴァイル自由都市をエーゼルシュタル、即ち、「ロバ小屋」とウィットのつもりで言います。というのも、ロットヴァイル市の旗はロバの絵が描かれていましたから。それにたいし、ニュレンベルク氏はネーベルング氏が臣下として仕えてきたアレクシウス十三世 (Alexius XIII.) を愚弄して、本来のギリシア語の意味、「癒し手」を避けて、ラテン語の意味の、少し無理はあるのですが、「にしん」(Hering) だとやり返します。というのも、ネーベルング氏は北ドイツ出身ですし、一方ニュレンベルク氏は南ドイツの出でしたからですが。ラーベは新しい備忘録の一頁目に、「ネーベルングとニュルンベルク 長年向かい合わせに居住。ネーベルング 北ドイツ人—ニュルンベルク 南ドイツ人。—フランクフルト・アム・マイン市か?—ネーベルング、北ドイツ人の事務官僚はある滅亡した小国の公使とともに来市、その後も Fr. 市に留まる。—ニュルンベルク、ロットヴァイル市出身、一前都市貴族—シラー信奉者、尚古的人物—詩作し、ガラス製台つき杯を蒐集する。」と記し、構想の段階で既に南北ドイツの対立を意識していたことが窺えます。このドイツの遺伝的確執は、市内をせかせかと不条理な力におされて歩くエラルドの思念の世界に説明的ともとれる形で反映されますが、そもそもこの政治的、歴史的底流は作品のテーマであります。

しかし、テーマは何であれ、目下、問題にする事柄、強烈なエネルギーを吐き出す人物にもどることに致しましょう。先程の口論は、気配に驚いて二人のそばにやってきたエラルドの前で、ニュルンベルク氏がこう言ったことから決定的破局をむかえます。「ところでじゃ、そいつがわしにとっちゃどれもこれもみなバカなにしん (Hering) じゃとて。アレクシス (Alexis) —さてとにしんとはギリシア語やラテン語じゃ、アレクシスなんてもんじゃあなかったらうわい。おまえにお願いがあるのじゃが、おまえはそいつを知っておろうな、えっ、エラルド?」これにたいし、「アレクシウス十二世によって洗礼の水からあげられ、その後も長年アレクシウス自身やその側近たちの間で成長し、まさに毛並みすぐれた立派な『出世』を順調に果たした」(S.425) ネーベルング氏は「私の名前も私の尊敬申し上げる閣下のお名前もアレクシウスでございまして、ドイツ語で『癒しをもたらす人』、『救い主』という意味でございまして」(S.374) と、この偉大なる瞬間、突如、とってつけたような落ち着きをみせて話しますが、それは瞬時にして破れ、「そうですか、よろしい」(S.374) という一言を最後に、新たに爆発し、

そのままよろめくように木陰から出て、庭をぬけ、住まいのほうへ歩いて行きます。

話は少し脇道にそれますが、ラーベはこの場面でわざわざ木陰という言葉を持ち出しております。彼は、森、あるいは木陰というものに、独特な意味をもたせてあり、それはほとんどの場合、この世の日常的なものの以外のものの力の働く場所、聖なる霊も邪悪なる霊も共に生き生きと彼らが支配する領分、人間の介入できぬ聖域ということと同義語となっています。その例を一つ、二つあげますと、“Else von der Tanne”のエルゼが、洗礼を受けるために村へ出掛けようとする日、森木立を行くとき、楽しげに彼女の回りを跳びはねていたのろ鹿は、森の最後の木陰をひとはねて光の中に出るや、立ちすくみ、エルゼをもといた森へ押し戻そうとします。その日、彼女は魔女よばわりする村人たちによって襲撃され、教会の敷居の上で受けた投石の傷がもとで死亡します。光の世界、現実の嵐にさらされる世界と、陰の世界、森の中、いわば保護区、わずかに理想社会が息づいている世界が対比されています。また、“Frau Salome”では、サロメ夫人と山中で出合った年来の知己の法律顧問のショルテンは山道を下って行きますが、高い森木立を抜ける以前と以後とでは雰囲気まるで異なります。山道にある二人は高踏な、互いに気心が知れた同士理解可能な話を交わします。サロメ夫人の血管の中を駆け巡る血、ギリシアの神々のあらぶる、気ままで繊細、高貴な血 *Ichor* について、冗談ともまじめともつかない話をするのですが、一步木立を抜けるや、ファンタジーの世界は掻き消え、視野いっぱい広がる夕映えの空と村落のパノラマに、二人はしっかりと現実に向かって立ち、すべてに敢然と対処していく姿勢が変わってしまいます。この光と陰の異次元性を高度に、多様に利用して独特のファンタジーの世界をラーベは切り拓いています。

そして今回も、「……二人の隣人は彼らのお定まりの場所の木陰に腰を下ろした。この瞬間には、彼らの気分はこの上もなく上機嫌そのものだった。」(S.369) この午後の和やかな情景が、娘のケートヒェンのピアノを弾きつつ歌う声が、息子のエラルドがゲーテの詩を読み耽っている様子が描写されますが、その直後に異様な文章が入ってまいります。「空には雲ひとつなかった、そして明日は一聖霊降臨祭だ！—明日は聖霊降臨祭の祝日、喜びの祭典！—ところが、そう、ふくろうの留まった聖霊降臨祭 (Eulenpfingsten) なのだ！—もしもサタンが、暗闇の王が心をもっているならば、銀髪の年頃となった二人の善良なパパをひつつかまえて、彼らのおでこをぶっつけあわせるために、彼の鉤爪をこのときジャスミンの葉陰からさし入れるということは、彼の全悪意をさしおいてもしはしなかったであらうに」(S.369) と続きます。

聖霊降臨祭の日、フランクフルトの町に悪魔がやってきて、人間に悪質ないたずらを仕掛けるという話が W.ハウフ⁶の“Mitteilungen aus den Memoiren des Satans”の一章、“Mein Besuch in Frankfurt”に出てきますが、これとの関連が1930年の『ラーベ協会通報』に掲載され⁷、その後ブラウンシュヴァイク版の全集が編まれる際、この指摘は H. ブッツマンによって註に記載されておりますが、その K. ボーテの指摘は大変興味深いうえに、ハウフ自身の名が作中人物の愛読書の作家として登場しておりますので、一見しておく価値もあらうかと思ひ

ます。ハウフのサタンは生の享受にうつつをぬかし、地上的な快楽をむさぼる、活気と生の鼓動があふれる町で、市民の魂を手中に握り、操って、古い政治的因縁をけばけばしい祭りの色彩の中におちまけてしまうというもので、話の筋だけを追うかぎり、同工異曲のそしりを免れません。しかし、ジャスミンの葉陰の場面で開陳されるラーベのサタン観は彼固有のもので、上記の引用文の後、行を改めて、すぐにこう続いていきます。「地獄に心などありはしないのさ！我々が欠点と名付けているものこそ、彼らが下劣にも彼らの優越性と呼び習わしているところのものなのだ。そして我々が悪魔にあの歳月経た名称を再発行したのであるなら、つまり、我々が、彼を暗闇の王と呼んだのであったなら、その言葉を厳かに取り消そう。夜、闇、とりわけ、邪悪の帝国と呼ぶのは真実ではないのだ。その逆に、そのことが彼に、この美しい、明るい、光のあふれた、晴れた日を彼の陰險な産物のためにまさにたっぷりと利用させることになるのだ。太陽が照って、ほころびかけたバラがその光の下で開くとき、ひばりがあなたの頭上で歌うとき、ぶなの茂みの濃い木陰で冷やそうとアスマンホイザーのピンを忍び込ませるとき、—そしてあなた、愛らしい花嫁が、愛しき人のまつげの先に結んだ、この上もなき麗しき露のその中にすべての恒星のその中の最も見事なその星の光のかげの照り映ゆるのをぞき見んとするそのときが、（ネーベルング叔母は恐らく別の表現をするだろうけれど）—そのときこそが、まさにそのときこそが、あの卑しき奴の出どころなのだ。そのときこそが、彼を取り巻くこの世の中の美しきことや愛らしきことに心をとめなくなった、あのこっぴどい目であって利口になった人間の出現のときなのだ。」（S. 370）と一度提起された世界はただちに打消されます。

ここでサタンと呼ばれているものは何かこの世とは無関係なものを指しているのでしょうか。だんだんとそれが実は生臭い人間のことを言っていることに気づかされます。もっと具体的に、この作品中の人物で言えば、ニュレンベルク氏のことを指していることが判然としてきます。ラーベは巧みに彼とサタンとをすりかえつつ、どちらともとれるあい昧な表現をとりながら、この世で成功を収める人間の正体を薄い紗布を何枚も重ねることによってしだいしだいにその紋様が見えてくる方法をとります。彼は、「まったくファウスト的でもメフィスト的でもない」（S. 415）ニュレンベルク氏がいかに落ち着き払って、上等のワインを傾けながら、この日の騒動を、息子の惑乱さえも、平然とワインをたしなむように楽しみ、とにかく息子が隣の娘に結婚の申し込みをしたらしいことも、その直後何かひともめあったらしいこともすべて見通して、怒りの熱に浮かされて飛び出して行った隣人が帰宅してきたときには、一切を自分の手で解決を図っておいて彼の面目を全面的に潰して、仕返しをしてやろうとほくそ笑むという一級の俗物に描きあげます。彼のことを、「立腹のさなかにあっても、最善の手をキープし続ける人」（S. 380）と言い、アメリカからもどってくるネーベルング氏の妹に逸速に関心の対象を移し、待ち受けます。もちろん、味方につけることが目的ですが、バルコニーに立つリーナがなかなかのものであることをオペラグラスでたっぷり鑑賞して知るや、それどころかさらに、結婚申し込みの第一のナイトを決め込むのです。先程のラーベがサタンについて述べた見解は、さらに「私はそんなものなどそう信用はしておりません」と語るような人物、即ち、

人の心に宿る美しき思い、永遠をかいま見させるそうしたことを否定し、現実だけを見つめる人間をはっきりと意識して、そうした考えは決して暗い闇夜から生まれるのではないと言います。明るい昼の日中に、つまり、日常の生活の中に人間という堂々としたサタンがひそんでいると言っているのですが、さらに「この年経た敵は、いつ最も印象強くこの地上の住人とたっぷり楽しいお付き合いができるかを、いつ彼の冗談を最も意地悪く登場させることができるかを、とくとぬかりなく承知しているのだ」(S. 370)とサタンのことでもあるようだし、また、ニュルンベルク氏そのものをさすようにも思われる記述を後続させています。のちに、ニュルンベルク氏がリーナにたいし、巨怪かつ模範的な花束⁸を如才なく女中に届けさせ、しっかりとネーベルング氏が留守の間にリーナ叔母との同盟を築く事に成功することを我々は知ります。しかし、彼がリーナに見たものはただの外見の良さだけではなく、「十分に働いて来た顔だわい」(S. 367)という彼女のしたたかさでもあります。彼女は姪のケートヒェンを膝にのせて、「さあ、私をごらん。私は紋章に描かれた一族全体の特徴を備えているのだよ。—ネコの鉤爪、フクロウの鉤爪、そして一枚の毒舌、それらすべてが黄色の地に描かれているのだけれど。その背後に私がいて、座って、そして私の両眼を通して見ているというわけなの。さあ、もう一度私の目の中をごらん、かわいい娘。私はいたずらに最後の親族のもとへはるばる外国からやってきたりはしませんよ」(S. 385)と話すのですが、この作品がちょうど揃うべき人物たちが一堂に会し、さあ、これからというところで終わりとなりますので、彼女の手腕を実際に知ることは出来ませんが、この謎めいた発言は二十数年前のことと関係してしたたかな報復をネーベルング氏は受けそうな気配を感じさせます。有毒なエネルギーをひめた、サタンのようなニュレンベルク氏とリーナの二人の平静という毒に比べれば、のちに触れるネーベルング氏やエラルドの突拍子もない、仰々しい行動は喜劇的に見えてまいります、それだけに非劇的、かつ滑稽でもあります。また、逆に、ジャスミンの葉陰へ忍び寄り、二人の調子をすっかり狂わせたアレクシウス十三世の亡霊とニュレンベルク氏とを次のようにダブらせて表出することで、ニュレンベルクの姿は巨大な影のように膨張し輪郭が定かでなくなり、無気味、グロテスクとなります。「彼は葉陰へ入ってきた。確かに彼のナイトガウンを羽織ってやってきた。だが、即ちそれは歩兵大隊の制服などじゃなく、黒のフロックコートに身をかため、手には円筒帽を、胸には星をちりばめた家格を示す幅広の階級帯をかけたという代物だったのだ」(S. 370 f.)。既に別の箇所で我々はニュレンベルク氏が緑色のガウンを着ていたことを読んで知っています。しかし、その直後の文は階級帯をかけた人物がアレクシウス十三世であることをはっきり匂わせているのです。最初の緑色のガウンはこの時の二重効果のために、いわば投機されていたのです。

W. カイザーは、ラーベのグロテスクはもはや気の抜けた、少しも魔神的なものをもたぬ「無害化されたグロテスク」と呼んでいます⁹。つまり、外部から侵入し、疎外を起こさせるあの無気味な「あるもの」Esが欠けていて、深淵の恐怖とは無縁であるというのです。一方、H. ヘルマースのほうは、カイザーの意見は従来のラーベ研究の呪縛にはまった過小評価であると

反駁し、カイザーの「疎外された世界」というグロテスクの定義づけにたいし、「世界の異化による」グロテスクと名付けます¹⁰。彼はラーベのグロテスクを四段階に分類して詳述するのですが、この作品はその三段階目「写実主義的グロテスク」の段階にあたります。即ち、グロテスクなるものは、存在のリアルな形態のなかにこそ虜となっているからであり、現実からこそ定住しているのだからというのです。従ってロマン主義作家のように世界が疎外され、飛翔し去るということはありません。

ラーベがシュトゥットガルトを引き払い、ブラウンシュヴァイクに戻った理由は祖国統一をめぐる議論でかの地と意見が対立したことであつたであろうという事情や、また、彼自身当時のドイツ国民の戦勝による浮ついた気分や、偏った愛国心、俄か景気に狂奔する人々に嫌悪と危惧の念を抱いていたこと、そしてこの時期、辛みの効いた風刺が目立ってきたことを考え合わせますと、存在の不安・生の裏にひそむ暗黒、そうしたものをひしひしと感じ、写実主義という枠内でこうしたことを表出していくことをはかったであろうと思われます。

そもそも美学用語であつたグロテスクはその最初の模範例がローマの遺跡、ティートゥス宮殿の装飾壁画であることはいうまでもありませんが、その奇怪な唐草模様、名状しがたい異様さ、混沌とし、大胆かつふざけた、滑稽かと思えば悲惨と残忍が共存し、もつれあい、互いに癒合してくねりあっている世界、逆説的ファンタジーの世界、本来生の英知と結びあっているのだけれど、一面では徹底的合理主義に対する逆流、他面では世界に対しては異化のサインを発射し、過剰で、その溢れ出たものが裏返しとなって呈示されていく、無拘束な世界、そうしたものがグロテスクの特徴に属します。ここで異化という場合、ヘルマースもその危険を指摘しているのですが、ブレヒトによって広められた、いわゆる異化の意味よりは広義に考えらるべきものです。今は、これ以上この論議にとどまることを止めて、もう一人の人物ネーベルング氏のほうに移っていきたいと思います。

ネーベルング氏はよろめくようにして向かい側の家へ戻ってきます。「彼は部屋の中をキーキーと何かの鳴き声にも似たぞっとするくすくす笑いを絶えずもらしながら、くるくると走り回っておりました。『へ、ヘッ、ヒィ、—アレクシス—にしん—私の閣下、そしてその畏くも父君であらせられる方—私の尊くも代父にあらせられる方—アレクシウス十二世—にしん！—この両にしん！そしてこの私にもしんだって—気の狂ったにしん！あのみさげはてたプチブルが、名誉もしらなきゃ、恥も知らぬ、悪臭放つキャベツ野郎が！』などなど。今や娘は横町小路の深淵に気づかされたという次第。そして残りの者たちはみな息苦しそうにあえぎつゝ、脇の方へ身を寄せていた。」(S.376) なんともこの公使館参事官の異様な興奮ぶりにおどろかされます。しかも、ラーベはこの場面を既に一度リーナ叔母への報告の折り、ケートヒェンに話させています。第四章で再びのべる理由はどこにあるのでしょうか。ラーベはこのシーンを始める前にこう断っています。ケートヒェンが既に素晴らしい角度から話しているけれども、「だが、ちょっとここでもう一度あの慇懃な堅物が我を忘れてくるくるとかけずり回るのを眺めて楽しむうじゃありませんか」(S.376) とあります。二度異なった人物から聞かされるということで、

有り得べからざることをもさもありなんと納得いかされることは確かですが、後から引用したこの前置きのお陰で、参事官の憤りへの共感、傷つけられた自尊心への同情、事態の進展への期待、そういったものはもうすでに味わい終えていますので感情を移入していく可能性は殆ど希望できません。いや、それとは全く逆のことをラーベはしているらしいのです。この前置きを使ってニュレンベルク氏があの上等のワインを出してきて、すべてをにやにやと楽しんだように、我々読者をも彼と同じものであることを確認させるのです。戯画化という心的仕組みをまるで手品の種明かしのように使っています。確かにまだあの使用人たちの息苦しい感覚は残っています。ネーベルング氏は新鮮な空気を求めて飛び出していきます。かれの歩きぶりのよさは現市長の模範としてまねたほどのものでしたが、いまは「真実、気の狂ったにしんなどというものではなくて、有頂天になったバツタといったありさまで跳びはねながら駆けて行っているのです」(S.376)。ネーベルング氏はこのような調子でフランクフルトの町をマイン河を渡って突っ切って歩き、人々を啞然とさせるのですが、彼の目はただ自分の心の中を去来するものだけにとまっています。今や、追憶から現在を守るのはニュレンベルグ氏により傷つけられた自尊心にうづくエロスのエネルギーだけとなります。

もう一人のニュレンベルク氏の息子、美学教授エラルドのほうを見てみましょう。父親と隣人の両者の中へ飛び込んで、最小限の時間内に分別と思慮を取り戻させようと殊勝な心がけなのですが、それとは裏腹に、隣家へ駆けて行く彼は既に「青、黄、そして赤、ところがたいていは明るい青色の火花と炎が彼の目の前でダンスを」(S.377)しているというありさまなのです。彼も現実の世界から夢の世界へと解き放たれて、聖霊降臨祭の鐘の音に誘われ、1500年の世界に、ドイツ民族が血を血で洗う宗教戦争以前の時代を眼前に見ながら、心は一途に隣家の父親の上着の裾を捕らえねばと、せかせかと歩き回るので。人々はぶつかられたり、彼に突き当たったりしては、思いのさまを言葉にしてぶっつけるのですが、彼のほうは「この世の真実というのは、しかし、半ば酩酊させられているのだ—もちろんまず第一に狂喜によって、その次には、しかし怒りによって—その上この世はヴェールに包まれて見させられているのだ。まっとうな人間は、とりわけドイツ人はただこの霧の中に入って生きているのだ。この霧のヴェールの中に！だからこそ彼は健康なのだ。二つの生活をもたないものはみななざけな犬だ。だが、しかし天才は新しい有り得ぬことを手にし、家の壁をよじ登り、まるで猫のように屋根の棟の上へあがるのだ。おお、ケートヒェン、私のかわいい人、私の第二の生命！いま、私は生命を三倍にも感じる、君の中に、そして—」と言い聞かせているのです。

「この瞬間、彼は三つの悪魔の名のもとに、一人の腹を立てた、肋骨の中にパッと息を吹き込まれた1858年5月22日の俗物にこう尋ねられたのである：お前さんはいったいどの見世物小屋主の所から彼女の鎖を解き放ってやろうというんだい？

『愛の神からさ！』(S.402)

それでも彼は正気に戻るところか、新たにミューズの神に誘われて眼前のフランクフルト市はますます孤島となり、おとぎの国の島へと変じていきます。が、しかし、ラーベは幻の中を

行く人物に現実を、実相を語らせます。それゆえ W. フェーゼはラーベはネーベルング = Nebelung, 十一月という月名を人物の名に採用し、霧深い陰湿な月と五里霧中に行くかのようなドイツの展望のきかぬ歴史と現在を象徴させたのだと解釈します¹¹。こうして当の人物をますます魔園の中を泳がせながら、絶えず彼が教授であることが言及され、注意が喚起されますから、この差し引き勘定の全く釣り合わぬ行為に覚える戸惑いを忘れることはできません。その熱源を思うとき、船酔いにも似た感じを味あわされます。しかし、一方、ラーベは決して感覚的世界に浸りこもうとはいたしませんから、どこかに振り子の静止位置を感じて、無気味の感じはやがて遠のき、同時に滑稽を覚えるようになります。「1858年5月22日の俗物」とわざとらしくさしはさむことによって、1500年の思いに浸っている本人からやすやすと距離が回復されて、世界は一方向に向かって飛んで行ってしまはせず、支点に固定された振り子は現実にはしっかりと戻ってまいります。「写実主義的グロテスク」の一つの限界かもしれません。

いわば投機的文体というのでしょうか、一度呈示した世界をすぐさまその手で打ち消しを行っては、読者の注意をより強力に喚起していく手法、また、熱に浮かされたようにかけずり回るネーベルング氏を「有頂天のバツタ」と心理的には不整合な形容を企てたり、あるいはパースペクティブを転換させてその落差を計算しつつして利用するなど、特異の境地を開拓しています。この異化傾向こそ、ラーベの文体の基本傾向として、H. ヘルマースが詳述しています¹²。

十二章を有するこの作品の経過時間が、午後のお茶の時間から夕方の暮れなずむまでというほんの数時間であることを考慮するとき、ラーベが筋の進展を語る作家ではなく、基本的に場面を叙す、写実する作家であることを改めて確認させられます。場面といった静止した事態のなかに、つまり Sein にリアルなものがグロテスクに巣くって潜んでいるという思想が彼を貫いているとみてよいでしょう。場面と場面をアラベスク模様のように絡めとりながら、総体として異種なものが、癒合して一つの絵画となって吐き出されてくる、そうした文学特徴をよくあらわす作品として、この“Eulenzpöngsten”をとらえることができます。

個々の人物をとりあげてみても、ケートヒェンという例外を除いて、そのほとんどが揃いも揃って毒を含んだ人物たちというのも珍しく、そうした意味でも特異な作品と見ることができます。普段ならば、損なわれた名誉のゆえに、狂気じみて恥も外聞もなく市中に行く人物に同情がよせられますが、断じてラーベはそうしていません。それどころか、徹底的に戯画化されているのです。二十数年前の苦い記憶に後悔の念を覚えるそのときでさえ、「彼が不承不承感動と呼んでいるものを、他の人たちはたぶん苛立ちと名づけることでしょう。目下、彼は感傷の息をふきかけられているのだ、ただ三分の一だけだったが。残りの三分の二に関しては、彼はまだ躊躇していた。それに確かに己を忘れてはいなかった。内部寄生虫や外部寄生虫によって鍛えあげられた社交上手なサケのように彼は素早く泳いでみたり、跳躍してみたりしながら、空気を取り入れ、速やかに普段通りの心の状態に戻ろうとつとめてみた」(S. 398)と至って冷淡にあしらわれています。その理由はリーナが度々ネーベルング家のものと呼んでいる特性、

即ちこの現世をどぎつく生きる人間、こうと思ったことは一切を無視してやりぬくあくどさをもつエゴイスティックに生きてきた人物が対象だからでもあります、内気で善良なラーベというイメージは姿を消しています。徹底して憑かれた人間が、ことの善悪を越えて、エゴイスティックな臭いの凄いエロスですが、それに魅入られて消耗しきるまで、ひたがけに狂奔しつくさせる、強烈なラーベがそこにいます。

感情移入が許されるかとみれば、たちどころに拒否され、はぐらかされする過程に醸成される、即ち、異化される集積のはてのグロテスクについて述べてみました。この投機的に放り出された世界を載せる文体を、それは伏線と呼ぶにはあまりに微少なもので含めて、異種結合を試みる文体を投機的表現と致しました。

注

- 1) プラトン：バイドロス 藤沢令夫訳、岩波書店 東京 昭和43年1月30日 37頁
- 2) プラトン：饗宴 鈴木照雄訳（世界の名著6）中央公論社 東京 昭和45年4月4日 154頁
- 3) プラトン：同上 155頁。エロスはポロス（「才能や資産に富むこと」、あるいは「行き詰まっても困窮することのないこと」を意味する）とペニア（「貧困、欠乏」を意味する）の息子であるので次のような定めをもっているのですが、「まず第一に、いつも貧しく、人がふつつ考えるように華紗で美しいなどというものではないのです。それどころか、ごつごつしたからだつきで、うす汚なく、裸足の宿無し者、いつも夜具なしで大地にごろ寝をし、大空の下、戸口や道ばたで横になり、母の性をうけてつねに欠乏と同居する者」だが、「他面、父の血をうけて、父と同様に、美しいものと善きものを狙う者、勇気があり、ことにあたって勇往まい進し、懸命に努力する者、手ごわい狩人、つねに何か策略をあみだす者、生涯、知を愛しつづける者、すぐれた魔術師、そしてソフィスト」なのだと説明されています。
- 4) プラトン：同上
- 5) LORENZ, Albert: Eros in Raabes Werke In: Jahrbuch der Raabe-Gesellschaft 1983 Waisenhaus-Buchdruckerei und Verlag Braunschweig 1983 S. 125-147（以後この論文誌は R. -Jb. と略記する）
- 6) HAUFF, Wilhelm: シュトゥットガルトに1802年11月29日生まれ、1827年11月18日同市にて死亡。作家、ジャン・パウル、E. T. A. ホフマンや L. ティークと親交をもつ。小説“Lichtenstein”で W. スコットの後継者とみなされる。“Der Mann in Mond”で当時流行作家であった H. Clauren の名で“Der Mann im Mond”というパロディを発表して裁判問題となる。その他の主著に Märchen-Almanach auf das Jahr 1826-1827-1828, Mitteilungen aus den Memoiren des Satan (E., 1826/27) Phantasie im Bremer Ratskeller (E., 1827)。
- 7) BOTHE, Käthe: Wilhelm Hauff in Raabes“Eulpenpfingsten”, Mitteilungen für die Gesellschaft der Freunde Wilhelm Raabes 20. Jahrgang 1930 Höckner Vorlag Wollfenbüttel 1930 S. 69-73
- 8) これはドイツ語で Monstre-und Musterstrauß となっていますが、それは怪物及びお手本の真陰勝負とともれ、恐らくラーベはそのことも計算していたと思われます。
- 9) W. カイザー：グロテスクなもの 竹内豊次訳 法政大学出版局 東京 1975年10月25日
- 10) HELMERS, Hermann: Das Grotteske bei Wilhelm Raabe In: Sammlung 1960, S. 199-212.
- 11) FEHSE, Wilhelm: Wilhelm Raabe Sein Leben und seine Werke Vieweg Verlag 1937 S. 401-407
- 12) HELMERS, Hermann: Die Fremdung als epische Grundtendenz im Werk In: R. -Jb. 1963 S. 7-30
- 作品からの引用はその都度、テキスト頁数を（ ）に入れて附しています。尚、テキストは、Wilhelm Raabe Sämtliche Werke, Braunschweiger Ausgabe Band 11 Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen 1973 です。